

乃木坂の一夜

望月 真

師は今はずかにかにいます 　あらあらと我を叱りし声も
聞えず

これは「三矢重松先生二十年祭祭文」（昭和十九年十二月）の祝詞に見える折口信夫先生の一首である。

昭和十九年三月、私は甲府中学を卒業と同時に、笈を負って聖地伊勢を訪れ、神宮皇学館大学の門をくぐったが、席暖まるに暇なく勤労働員、そして予備士官学校に入校。動員先の宿舎から単身、北九州に直行し、弱冠にして国の大事に馳せ参じた。

南朝の柱石としてその芳魂は、筑後川の流れとともに尽きない菊池一族のゆかりの地、久留米郊外の仮兵舎に

屯したが、時利あらず、陸軍伍長として終戦を迎えた。昭和の防人として国難に殉ぜんとした往時を偲び、感慨に堪えない。

○

復員後しばらく郷里で晴耕雨読の生活を送っていたが、やがて皇学館より国学院大学に転学し、戦後の虚脱感の中に、心身ともに疲れ果て、ひたすら心の支えを探し求め、遍歴した。縁あって乃木神社に参拝し、ある秋の一夜たまたま御殿場から上京された加藤玄智先生の講筵に列する光栄に浴した。

やがて高山宮司のご配慮によって東山湖畔の精舎学寮窟に寄寓する奇縁に恵まれた。今思えば、実に神人乃木將軍の恩資によるものと、感泣措く能わざるものがある。『宗教学精要』の改訂をはじめ、『学校教育と成層圏の宗教』『知性と宗教―聖雄信仰の成立―』『吾が行く神の道』などの口述筆記を仰せつかった。

ウォッシュバンの名著『乃木』に、

満身ただ忠誠、個人的存在を没却して、純理想主義に立脚する点に於て、近世誰あつてこの日本の古武士乃木大将に

匹敵することが出来よう。

とあるが、先生は常に乃木聖雄によって、活眼を開かれたことを述懐されていた。

凱旋された乃木將軍が、明治天皇に御報告申しあげた復命書を口述された時、先生は急に端座され、涙ながらにその一節を引用せられた。あの一瞬に思いを致すと、今も目がしらが熱くなるのを禁じ得ない。

先生は単なる宗教学者ではない。高山宮司も申されるように先生は「真剣なる乃木信者」であられた。そして神道の究極は、現つ神信仰であることを、明治天皇と乃木聖雄の間に見出された。「將軍は、天皇陛下に赤心を捧げていた。陛下の崩御とともに、もはや生き存らう責務は終わった」とウォッシュバンも銘記している通りに。

○

先生はまた戦後の道義頹廃と、祖国の将来を深く憂慮され、宗教界とくに神道界に人なきを嘆じつつも、次の言葉を口にされたことを報じたい。それは伊達巽・高山貴・鎌田太一の三氏の如き人こそ、真の憂国の志士で、幕末に国事に奔走した久留米の水天宮の宮司真木和泉守

であると、衷心より讃嘆されたことが、今もりんりと耳朶に響いてくることである。

富士山麓に近い郷里山梨の山村に余生を送られた俳人飯田蛇笏は、その師高浜虚子への思慕の情を、次の一句に託されている。

師をしたふ ころろに生くる 卯月かな

先生は、聖雄が金科玉条とされた「熟慮断行」を日頃愛誦されるときも、後学に対する温情も至れり尽せりであった。私の東大文学部に進学のさい、また二十年前に乃木神社で結婚式を挙げた時も、懇篤な祝詞と漢詩とを頂戴した。なお先生の老後を親身になってお世話申しあげた杉浦千代様のこと、また早くから学芳窟に参じて研鑽をつまれた酒井堯先生や、老境に入られた恩師のご生活を懸念され、知行行三位一体の深遠な研究の推進のため、物心両面にわたり献身された柳田喜代子女史のお心遣いを、尊くありがたく偲ぶ次第である。

学芳窟では先生のことを「神道居士」とも申しあげた。超然たる好々爺でもあられた。

○
学労働で親しく先生と起居を共にさせていただき、日夜その警咳に接し、万葉人の雄心と利心を、そして王朝人の雅心を、あわせてもたれた先生のお人柄を、できる限り同志諸賢に伝えたいと思ひ、最後に付記しておきたい。

『乃木將軍日記』(昭和十一年十月)
(遺徳顕彰會刊)に次の詠歌が見える。

駒とめてしばしは我をわすれけり

朝日に匂ふ花の下蔭

大君の御楯とならん身にあれば

きたへざらめやみがかざらめや

「金州城外」をはじめとする詩魂は、先生を強く魅了された。「旅順口の戦勝者としてに非ず、奉天戦の英雄としてでもない。ただ本務遂行のために生き、過去数百年伝来した理想の実現のために生きた人……」「乃木大將はかくの如き人であった」と結んだウオッシュェバンを憶うとき、われわれは現代日本人として、内心忸怩たるものがあるのである。今こそ藤玄学人の心を心とし、世界

に向かつて聖雄鑽仰の精神を高揚すべき使命を痛感せずにはいられない。『聖雄信仰の成立』に心血を注がれた「暁天の星」の如き直言直行の先生の悲願の維持継承に応えねばなるまい。

冒頭に引用した一首には折口先生の師恩報謝の真情がこめられているが、大正十三年の「三矢重松先生一年祭祭文」では「あはれ大人の命のいまさざらましかば、われどちいの今日の学問も、思想も生ひ来ざらましを」と景仰されている。この師弟の奇しき邂逅は、賀茂真淵と本居宣長の、松阪の一夜を想起させる。唐の韓退之の「師説」を読むとき、師道嚴存の古きよき時代を懐かしく思ひだすが、『平家物語』(巻二)にも「恩をしるる人とはいふぞ。恩をしらぬを畜生とこそいへ」とあり、「まづ世に四恩候。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩是れなり。其の中にもっとも重きは朝恩なり」と見える。

明治四十年十二月二十九日、牛込宗参寺の山鹿素行先生の墓前で奏上された乃木將軍の祭文は、実に朝恩と師恩を掲仰礼讃された珠玉の文藻である。御殿場から乃木

坂への道を、私はいくたびか先生に随行したが、必ず乃木家先祖代々の墓前に参詣された後姿が懐かしく拝され、精進常楽のご生涯を尊くお偲びする次第である。先生は真の乃木精神の信奉者であられたが、そのことは語をかえて言えば、先生は国体支持者であり、憂国の士であられたのである。

(都立城北高校)

会 告

明治神宮教育学部長鎌田太一氏は、一身上の都合により本年三月末明治神宮を退職し、郷里秋田県雄勝町の愛宕神社宮司として帰任された。藤玄会、生祠研究会ならびに記念学会に至るまで、終始本会のため幹旋役として尽瘁された。多年のご苦勞に感謝するとともに、今後のご長養を祈つてやまない。

(新住所は会
員名簿参照)

各 県 別 「 民 俗 芸 能 誌 」	神奈川	民俗芸能誌	永田 衡吉	一品切一		
	埼玉	民俗芸能誌	倉林 正次	6,800円		
	岩手	民俗芸能誌	森口 多里	9,500円		
	新潟	民俗芸能誌	桑山 太市	5,800円		
	栃木	民俗芸能誌	尾島 利雄	3,600円		
	兵庫	民俗芸能誌	喜多 慶治	52年刊		
	日本の祭と藝能			本田 安次	5,800円	
	改訂	日本の人形芝居		永田 衡吉	7,500円	
	藝	能	論	纂	本田安次博士 古稀記念会編	8,500円

東京都千代田区神田錦町1-4-4 錦正社
〒101 振替東京 3-136535